

は頻繁に來ているんです。一週間に毎日のように來て見ていたのですから。心は大川さんと繋がりがたかった、でもいまになって改めて褒めるわけにもいかない、という、その辺は明治の男の気持ちだったのかな、と僕は思います。この美術館のことを気にしてはいたがオープンしてからは頻繁には來ていない。多分オープンしてから1回くらいしか來ていないんじゃないですか。

【大川栄二と桐生】

熊倉／大川さんはなぜ絵を集めようとしたのか。それは初めから自分の愉しみだったのでしょうか。将来的に公共のものを残そうとしたのか。奈良さん、そのへんお聞きになられたことがありますか。
奈良／若いときに大川さんは肺結核を患いました。それがスタートです。その折に集めたのが週刊誌の表紙絵です。それらをスクラップしていましたが、万が一火事があってもこのスクラップブックは持って出るとよく言っていました。それが自分を慰め精神的な支柱だったのかもしれない。それと、実家である創業300年の松屋畳店の存在は大川さんの誇りでした。その誇りが絵画のコレクションに直結したと思います。あるとき私が桐生の明治時代の街の地図を作っているとき、そこに松屋畳店の絵が無いと言って大川さん自筆の実家の絵を持って來られ、強引に絵図面のなかに入れるよう言われたことがありました。有隣館に飾ってある図で一枚だけ異質です。その強引ともいえる姿勢は誇りから來ているんですよ。大川さんが絵に興味を持つようになっていった理由は、家の誇りと群大卒業で、その友達、先生、そういうものの中に根付いている気がします。

熊倉／桐生の街に対する思い、誇り、自分が動いたときに、結果論かもしれませんが、奈良さんたちのように桐生の市民と一緒に動いてくれる、そんな確信があったんでしょうね。

奈良／やはり桐生はユニークな街だとおもう。伝統がある街にしてはとてもウェルカムで紳士な街です。貪欲にいろんなものを、人を受け入れる素地があります。大川さんが桐生に來た時、当時は長崎屋（スーパーマーケット）だったんですが長崎屋のワンフロアを美術館に、という考えもあった。あとはいろいろとほかの土地からも話が持ち上がっていました。でもやはり桐生に最後までこだわりをみせていた。また面倒見のいい大川

さんのお姉さんが桐生にいた、ということも大きかったと思います。

熊倉／今度は桐生の街という問題になってきた時に、大川さんと井上さんとを実際に繋いでくれたのは山鹿さんでしたが、その背景に小池魚心さんという大きな存在があると思いますが、小池さんの話を山鹿さんしていただけますか。

山鹿／井上先生と小池さんをつないだのは民芸でありました。小池魚心さんは味に対して非常に厳しい方だった。魚心さんのお作りになるものを井上さんが食べてくださるということは頻繁にありまして、井上さんが來た頃、私のはじめてお会いしたのが24～25歳の頃ですが、多分、美術館の用地をお探しになっていた。桐生にもないか、ということで頻繁にお見えになっていたようですね。そこで魚心さんに井上先生を紹介されまして井上さんとのつながりができるわけですが、魚心さんとその息子さんの一正さんに連れられて井上邸へ行きました。レーモンド（アントニン・レーモンド：建築家。フランク・ロイド・ライトのもとで学び、日本にもモダニズム建築の建物を多く残した）の設計でつくられた建物でした。矩形の非常にユニークな建物です。障子がとてもきれいなんですが、下にフランスの古い瓶が置かれていて、それが外からの光で非常に美しく映ってまして、部屋のなかにはブラックの油絵がありました。お茶を出されましたが、それが李朝の汲出しで出されたんですね。また、テーブルの上に置かれた灰皿はピカソの灰皿でした。すべて凄いものをそこで拝見し、井上さんの美意識というものをくみ取りました。私は生涯、この井上先生と魚心さんとの影響力が大きいです。また、井上工業ビルの最上階にファンデーションギャラリーを開設されましたが、開設されたとき、桐生の旧家から借用した渡辺崋山があったものですから、私は文人画に興味を持っていて崋山のことを話しますと、先生は、自分は崋山の絵は鋭すぎて嫌いなんだと言われました。渡辺崋山は桐生に非常に縁のある方ですが贋物が多いのです。それも井上さんはちゃんとご存知で、そのうえで手出しをしないということだったのだと思います。ですから井上コレクションには崋山の作品はありません。

（次号へ続く）

（編集：小此木美代子）

もりだくさんな創作体験！

～ゴールデンウィークワークショップ報告～

池田寛子

2019年5月3日(金)～6日(月)のゴールデンウィーク中の4日間、企画展「松本竣介 子どもの時間」の関連事業として「こども×アート×まち」をテーマに3種のワークショップを行いました。

5月3日、4日は「ダンボール de アート」と題し5ピースほどのパズルやこいのぼりを、桐生市内の企業から提供頂いた素材で作りました。パズルは大川美術館の所蔵作品の中から絵柄を選び、枠を飾り付けました。



ダンボールで作ったこいのぼりは美術館の壁にはって、泳がせていってくれた子もいました。

5月5日は群馬県立女子大学とのコラボ企画「みんなアーティスト～子どもの日スペシャルワークショップ」を開催。



群馬県立女子大学でアートマネジメントを学ぶ学生が参加者の創作をサポート。子どもたちはアドバイスをもらいながら、シンプルなボックスをお家や人形、時計など自由な発想で飾り付け、個性豊かな作品をつくっていました。



初めての連携企画でしたが、参加した学生も子どもたちも、コミュニケーションを楽しみながら創作することができました。

5月6日は、「親子でひもかわづくり」を開催しました。桐生市の名物である幅の広いうどん「ひもかわうどん」を親子で作るワークショップです。講師は桐生市内にある手打ちうどん・石臼挽き手打ちそばのお店「しみずや」の清水利信さん。



美味しいうどんにするためのコツを教わりながら親子で協力してうどんのタネを踏んだり伸ばしたりしていました。



最後はミュージアムカフェのテラスでうどんをゆで、みんなで自分たちがつくったうどんを食べました。



もりだくさんな内容となった今年のゴールデンウィークワークショップ。地域との交流や文化を楽しみながらの創作体験となりました。

(大川美術館 学芸員)

展覧会のご案内

大川美術館ベストコレクション

7月17日(水)～9月16日(月・祝)



藤島武二《婦人像》1918年頃

大川美術館は、松本竣介、野田英夫をめぐる日本の近代洋画を中心に収集した初代館長・大川栄二（1923-2008）が築いたコレクション約1,200点を基礎として1989年に開館しました。本展では、収蔵作品約7,300点のなかから、「ベストコレクション」として約200点を紹介します。コレクションを特徴づけるのは日本の近代洋画史に大きな足跡を残した松本竣介と野田英夫を中心とした日本の近・現代美術です。また海外の作家では、おなじみのパブロ・ピカソ、マックス・エルンスト、ベン・シャーンらの作品を展示します。

住宅の名残をとどめる大川美術館は、小部屋がいくつも連なって階下へ降りてゆくという、個性的な展示室が特徴です。展示室を、行き来しながら、大川美術館コレクションの真髓をご堪能いただけることとおもいます。